

美術の資質・能力を育む授業の工夫

古屋 美那実

1. 美術科研究主題について

(1) これまでの本校美術科の研究

平成 29 年度から平成 31 年度の 3 か年は、「新たな世界を主体的に創造する生徒の育成～『見方・考え方』を働かせた学びを通して～」という全体研究主題の基、「美術の資質・能力を育む授業の工夫」を研究主題とし、造形的な見方・考え方を働かせた学びに着目した題材構成や授業の手立ての検討、実践を行うとともに、それらを通して育まれた資質・能力を見取ることについての研究を行った。研究においては、授業構成とワークシートの 2 点を工夫することにより、生徒自身の学習調整を促してきた。

平成 31 年度から令和 3 年度の 3 か年は、全体研究において『創造性に富んだ、未来を切り拓く生徒の育成～「主体的な学び」のプロセスモデル実現を目指して～」という主題の基、未来を切り拓く生徒に必要と考えられる「自ら問い続ける力」と「創造性」に着目し、「主体的な学び」のプロセスモデルやその評価について研究を行った。

(2) 生徒の実態



(3) 全体研究主題より

美術科で育成する「創造性」について

全体研究において「創造性」は、「自ら課題を見出し、これまでに学んだことや新たな知、技術革新を結び付けることで解決して、新たな価値を創り出すための資質・能力」だと述べている。

全体研究において示された「創造性」を美術科において考えると、次のようになる。課題を見出すこととは「作品を通して何を表したいか」という主題をつくり出すことである。美術科における主題とは、価値や心情等に関わるものといえ、生徒自身が自らの経験等をもとに対象や事象等に向き合い、問いかけることで生み出すことができるものである。そして、課題を解決することとは、美術科においては主題を表すということである。そのために、生徒自身がそれまで経験したことや学んだことを生かし、形や色、描き方等を考え、感じたことから工夫をこらす等しなければならない。つまり「私の主題をどのように表現するか」という生徒一人一人が、それぞれの問いを持ち、それに向かって一人一人が独自に解決の仕方をつくり出すことである。その結果、生徒が得られるものは、自分にとっての新たな意味や価値であり、唯一のものである。

以上を踏まえ、美術科では「創造性」を、自らの経験等をもとに対象や事象に向き合い、作品を通して「何を表したいか」を問いかけることで主題を生み出し、主題を「どのように表現するか」を形や色、描き方等を考え解決する中で生まれる、新たな意味や価値をつくり出すための資質・能力と考える。

(4) 1年次の研究のまとめ

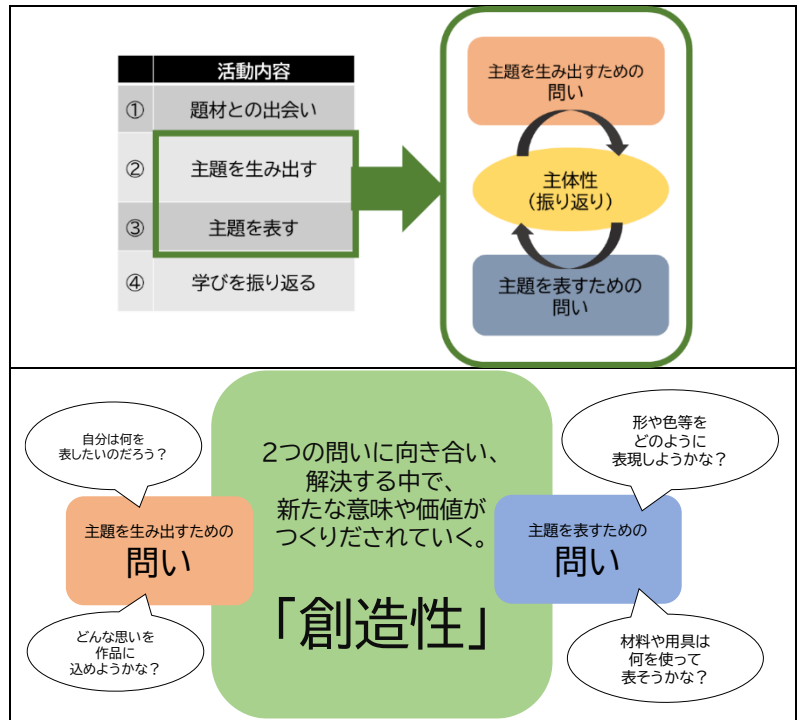
(3)の全体研究主題に述べた、美術科における「創造性」の考え方を基に、題材を通して創造性が育成されていく過程を右図のように整理した。

これを踏まえ、「創造性」を育成していくためには2つの要素が必要だと考えた。

1つ目は「主題を生み出すための問い」である。「主題を生み出すための問い」とは、自分が題材を通して「何を表したいのか、何をつくりたいのか、どういう思いで表現しているのか」等、強く表したいこと心の中で描くことであり、自分の思いや願いに迫る問いである。自分の表したいことを見つけ、主題を生み出していくためには、自らがやってみよう、挑戦してみたいという動機づけが必要となり、主体的に学びにつながる題材や発問の工夫が重要となると考えた。そこで生徒が主題を生み出し表すにあたって生徒に働きかける発問を構造化し、整理した。

2つ目に「主題を表すための問い」である。自分の主題に対して、形や色、描き方等、発想したことをどのように表現するかを考えることを意味する。表現の意図に応じて様々な技能を応用したり、工夫を繰り返したりして自分の表現方法を見出していくために重要な「問い」となる。自らが工夫して表現してみたいと思える動機づけに繋げるために、発想や構想を深めるワークシート（ICT）や生徒間の対話の場、発問の工夫が重要となると考え、授業の中でそれらを意識した実践を試みた。

加えて、2つの「問い」を基に主題と生み出し表現していく中で、自らの問題の解決に向けて試行錯誤していくためには、主体的に学ぶ姿勢が重要となる。そこで、振り返りの工夫が重要と考えた。全体研究にもある「主体的な学び」のプロセスモデルを「振り返り」の学習過程を重点に置き、学びを振り返り課題解決に向かって自らの学びを調整できるよう指導・支援を行った。



2. 研究の目的

生徒が「問い」から新たな意味や価値をつくりだす中で、主題を生み出し表現していくための美術の資質・能力を育む授業の工夫について明らかにする。

3. 研究の内容

- ① 「主題」を生み出し、表現していくための手立ての検討
 - ・「主題を生み出すための問い」…自らがやってみよう、挑戦してみたいという動機づけに繋がる題材や発問の工夫
 - ・「主題を表すための問い」…自らが表現してみたいと思える動機づけに繋がる発想や構想を深めるワークシート（ICT）や生徒間の対話の場、発問の工夫
- ② 自ら学びを調整しようとする態度を見取る手段の検討
 - ・「振り返り」の指導をする中で、プロセスモデルを生かして生徒自身に自らの学びをモニターさせ、自己評価と他己評価を生かして学びを進めさせる。

4. 3か年の研究の見通し

1年目である令和4年度は、「創造性を働かせた学び」に育成させていくために「主題を生み出すための問い」と「主題を表すための問い」を視点に置いて整理をしながら授業の開発を行い、創造性が育成されていくための有効な手立てを検討した。

2年目である令和5年度は、1年目の研究結果を基に検討し、授業改善を行い、発問の構造に注目して主体性を持ち問いを深めていくことができるようになるための指導の工夫について検討していく。

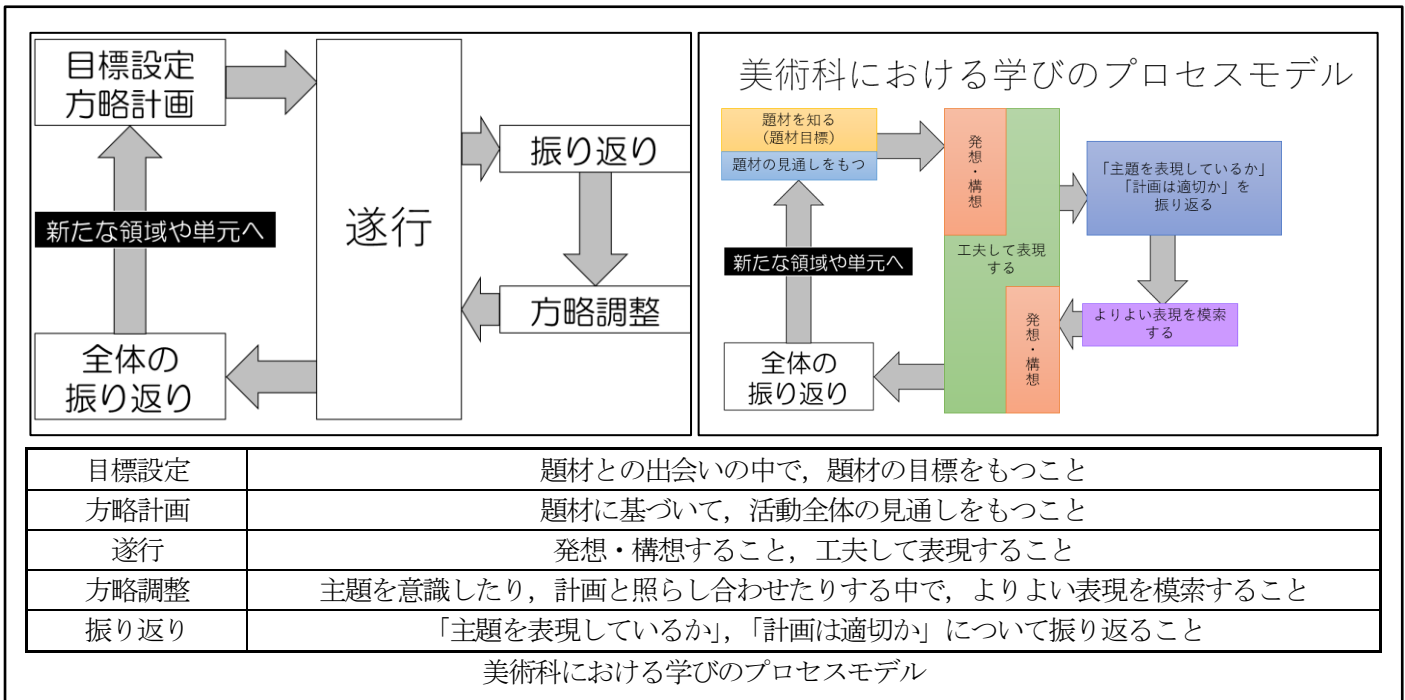
3年目である令和6年度は、1、2年次の実践を基に、学びの評価方法について検討していく。

5. 2年次の研究

2年次では、全体研究と1年次の成果と課題を踏まえ、「『主体的な学び』のプロセスモデルを意識させた学びを実現するための手立て」、「新たな意味や考え方を見出す思考力、判断力、表現力を育成する手立て」の2つに視点を当て、創造性を育てていくための授業の在り方について検討した。

(1) 「主体的な学び」のプロセスモデルを意識した学びを実現するための手立て

まず、美術科において「主体的な学び」のプロセスモデルを以下のように整理した。



上記に示したプロセスモデルを生徒自身が実行しながら、活動の中で生徒が問いをもち「主体的な学び」を実践していくことを目指した。

上記を踏まえ、生徒が「学習方略」を獲得していくための手立てについて考えた。全体総論にも述べられている通り、「学習方略」とは生徒たちが主体的に「見方・考え方」を働かせたり、「考えるための技法」を活用したりして学ぶことができるようにするための「学び方」であるとまとめている。これを踏まえ、生徒が主体的に学習に取り組んでいくためには、生徒がプロセスモデルを実行していく中で、指導者が「考えるための技法」を一方向的に与えるのではなく、生徒自身が活動をを進めるなかで必要を感じて内容に応じて活用できるようになる必要がある。このことによって、活動に対してよりやりがいを感じられるとともに、生徒の資質・能力の向上につながると思う。そのため、生徒が自分事として主体的に活動に取り組んでいくために、「学習方略」を生徒自身で活動の中で必要性を感じて選び取らせていくことを3年間の中でできるようにしていきたい。そうすることによって、生徒自らが学びを調整することができるようになると思う。そこで、まず美術科における「学習方略」の概要について、以下のようにまとめた。

<p>〔美術科における「学習方略」の概要〕</p> <ul style="list-style-type: none"> ㊦物事について造形的な視点で捉える。 ㊧他者の意見を聞き、検討し、必要に応じて取り入れる。 ㊨自身の感じ方や考え方等を確認する。 ㊩表したいものと表したものを確認し、再検討する。 ㊪活動の見通しをもつ。

題材の分野の特質や活動内容に応じワークシートや指導者の働きかけ等を通して学習方略を身に付けられるようにしていく必要がある。

上記を踏まえ、生徒が「学習方略」を獲得していくための手立てを整理した。まず、生徒が「学習方略」を獲得していくためには、「主体的な学び」に向かうような題材を設定する必要がある。生徒の学ぶ意欲を維持させるような題材を設定していくために、題材の設定する中で考えるべき視点について以下のようにまとめた。

<p>〔題材について〕</p> <p>生徒にとって魅力的な題材を扱うことで自ら主題を生み出すことのできる活動を設定する。</p> <ul style="list-style-type: none"> → 関係性…生徒にとって身近な内容であること → 難易度…生徒にとって目標を実現する可能性が感じられること（テーマ・材料・用具）
--

- 必然性…生徒にとって考える価値があること
- 多様性…考えや表現の多様性があること

題材は、学年や生徒の実態、学ぶ環境によって実行できる内容は大きく変動するが、上記に述べた視点を領域に応じて考えることによって、生徒の主體的な学びを維持することにつながるのではないかと考えた。

次に、学びを深めるための〔授業の手立て〕について整理した。これは結果的に生徒の「学習方略」となり、生徒が活動の価値を感じ、必要に応じて選択できるようにしていきたい。また、上記で述べた美術科における「学習方略」の概要と照らし合わせて、育成につながる手立てを当てはめた。

〔授業の手立てについて〕 → 「学習方略」となるもの

- ① 参考作品を分析する。（教員が制作したもの、過去の生徒作品、画家の作品等）㉔㉕
- ② 思考ツールを活用する。㉔
- ③ アイデアスケッチ（作品）を分析し、情報収集する。㉔㉕
- ④ 作品を見て、振り返る。㉕㉔
- ⑤ 振り返りシートを通して自己の活動を振り返る。㉔㉕
- ⑥ 既習の学習事項を振り返る。㉔

※これらの手立ては以下に示す研究授業で活かしている。

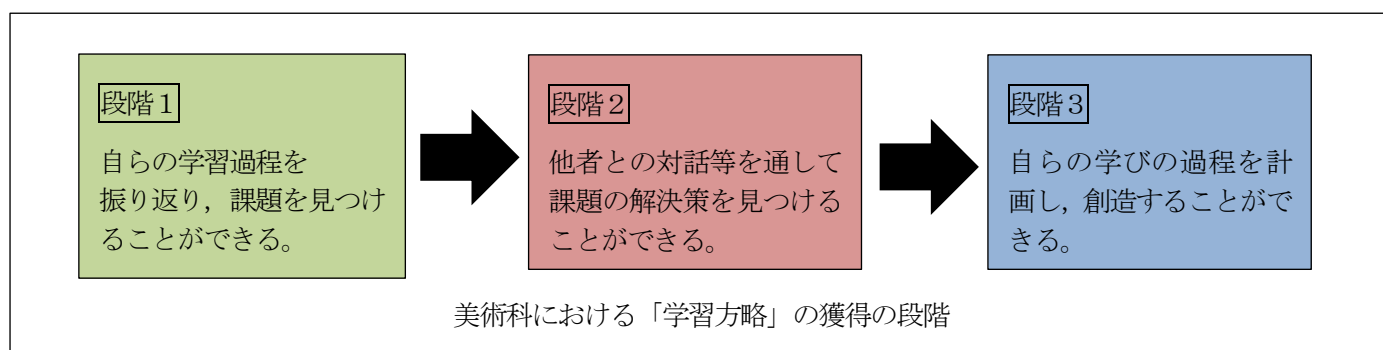
また、一人でも多くの生徒が主体的な学びをできるようにしていくために、〔授業中の生徒への働きかけ〕について整理した。これらは、特にCの生徒に焦点を当てて働きかけることとなる。

〔授業中の生徒への働きかけについて〕 ※主にCの生徒へ働きかけること

- ⑦ 題材を生徒の身近なものへと落とし込む問いかけを行う。
- ⑧ 発想を広げる手立てを示す。（ウェブマップを書かせる、人の考えに触れる）
- ⑨ 構想を具体化させる声かけを行う。（選択肢を与える、比較する、人の作品を見る、ツールを替える等）
- ⑩ 主題を確認させる問いかけを行う。

上記の内容をプロセスモデルに当てはめ（指導案を参照）、「主體的な学び」を実践していくことで、「学習方略」の獲得を目指していきたい。

最後に、上記の手立てや働きかけを実践していく中で、生徒の「学習方略」の獲得の段階を以下のようにまとめた。



3年間の題材の中で、それぞれの生徒の獲得の段階に応じて、授業の中での働きかけを工夫していく。

(2) 美術科における新たな意味や考え方を見出す思考力、判断力、表現力を育成する手立て

美術科の学習指導要領では思考力、判断力、表現力等の目標について以下のように説明されている。

造形的なよさや美しさ、表現の意図と工夫、美術の働き等について考え、主題を生み出し豊かに発想し構想を練ったり、美術や美術文化に対する見方や感じ方を深めたりすることができるようにする。

美術科において育成する「思考力、判断力、表現力等」とは、表現の活動を通して育成する発想や構想に関する資質・能力と、鑑賞の活動を通して育成する鑑賞に関する資質・能力の二つから構成されている。

「思考力、判断力、表現力等」をより豊かに育成するためには、発想や構想と鑑賞に関する資質・能力を総合的に働かせて学習が進められるようにすることが大切である。発想や構想に関する資質・能力や鑑賞に関する資質・能力を育成する観点から、題材の活動において造形的なよさや美しさ、表現の意図と工夫、美術の働き等の学習の中心になる考えを明確にすることにより、鑑賞したことが発想し構想を練るときに生かされ、また発想や構想をしたことが鑑賞において見方や感じ方に関する学習に生かされるようになることが大切である。それぞれの資質・能力が相互に関連して働くようにすることを積み重ねることが、より豊かで創造的な「思考力、判断力、表現力等」の育成につながると考えられる。

上記を前提として、本研究においては問いを生み出す「主題」に重点を置いている。(1)で述べたように「主題を生み出す」とは、生徒自らが感じ取ったことや考えたこと、目的や条件等を基に「自分は何を表したいのか、何をつくりたいのか、どういう思いで表現しようとしているのか」等、強く表したいことを心の中に思い描くことであり、独創的で個

性豊かな発想や構想をする際に基盤になるものである。

以上を通して、本研究においては思考力、判断力、表現力等を「自らが題材を通して主題を生み出し・表し・読み取るにあたって向き合う、問いを解決する中で培われる能力」と整理する。上記を踏まえ、思考力、判断力、表現力等を育成するための手立てとして以下のように整理した。

発想力・構想力に関して

発想力…生徒自身が主題を生み出していくための、動機づけに繋がる題材や発問の工夫

構想力…生徒自身が主題を表していくための、工夫して表現してみたいという動機づけに繋がる構想を深めるワークシート（ICT）や画材、生徒間の対話の工夫

鑑賞の能力に関して

主題を見取っていくための、形や色等の表現と特徴に注目させるワークシートの工夫と鑑賞資料の選定

2年次の研究においては、上記の内容の中でも昨年度から継続してきた発問の構成を継続して作成し、考えを深める発問について分析を進めていく。また、鑑賞の能力に関しては、導入におけるワークシートと鑑賞資料について検討した。

（3）2年次の成果と課題

成果

- ・今年度は班での形態で行う際に、リーダーを立てて進行を任せお互いでアドバイスをし合ったり、個々の班のペースで進めさせたりすることで、教員が主になるのではなく生徒の個々の学びを尊重させることができた。
- ・発問の構造をより構造化・具体化することで、生徒への働きかけが明確化された。
- ・昨年度と同様に多様な店や施設のロゴマークを考えることを可能にしたことで、生徒が自分の好きな店や施設を選択してロゴマークを考えることができたため、意欲的な活動に繋げることができた。

課題

- ・扱う情報量が多かったため、“単純化”させる工夫が不十分だった。自分のこだわりを明確化することで、扱う情報を減らしたデザインにする工夫も必要となる。
- ・生徒間で鑑賞する際に全体の作品を見て、気になる生徒のところへ行くようにしてもよい。先生の意図としてはそのほうがまんべんなく色々な作品に触れられる。
- ・作品を見ると、まだまだ子どもたちは意味で描いている生徒が多いため、自分の伝えたいイメージを色や形で表現する工夫を考えさせたい。また、「遠くから見たとき」という視点が薄い。（最終的にできたものをどう扱っていくかを考えさせることで、デザインも変化する。）
- ・「おしゃれ」という個々によって捉え方が違うイメージに対して、どれだけお互い共有できるのか、考えを深めることも重要となる。（主題における言葉の大切さ）

6. 2年次の研究のまとめ

今年度は、『新たな価値を創造する生徒の育成』という全体研究主題の基、生徒が「問い」から新たな意味や価値をつくりだす中で、主題を生み出し表現していくための「美術の資質・能力を育む授業の工夫」を研究主題として、2年目の研究を行った。その中で2年次でも、生徒が「問い」から新たな意味や価値をつくりだすこと、つまり、主題を生み出し表現していくための美術の資質・能力を育む授業の工夫について明らかにすることを目的に実践を行った。研究の結果を以下のようにまとめる。

- （1）「主体的な学び」のプロセスモデルを意識した学びを実現するための手立て

本研究において「主体的な学び」の実現を目指す中で、今年度は班での形態や個々の活動の進捗に合わせる等して、個別最適な学びと協働的な学びを目指すことで、生徒の主体的な学びにつながると考え、「主体的な学び」のプロセスモデルを設定した。そして、本研究については、具体的な生徒が主体的に学習に取り組む姿として、指導者が「考えるための技法」を一時的に与えるのではなく、生徒自身が必要性を感じて活動に応じて活用できるようになることを挙げ、そのために、「学習方略」の獲得を目指した。

実践の成果として、学習方略を意識した実践をする中で、班での制作を始める前に活動の流れを考えさせたり、その活動を行う意味について問いかけたりすることで、その活動に対して言われるがままに行うのではなく、意味を捉え実感を伴った上で取り組ませることができた。(振り返りシートの生徒の記録参照) よって、継続して指導をすることによって、生徒が問題を目の前にしたときに自分で学習方略を選択肢して解決したり、仲間が困っているときに選択肢を与えたりすることができるため、生徒が主体となる活動の実現に繋がると考えた。

しかし、学習方略について検討する中で、学習方略を設定するには生徒自身から気付かせ、その学習方略を使って生徒自身の力で問題解決させることを目標としてきたが、生徒にゆだねることに限界があると感じた。それは、美術科においては生徒自身の感覚(思っていることや感じていること等)を言語化し表現するため、生徒の力だけで考えを深めていくことが難しい。よって、そこには教員の直接的な生徒への働きかけ(発問)がとても重要となる。題材の中で生徒自身に考えさせる場面と、教員が働きかける場面を活動の目的によって考えることが重要だと感じた。

1, 2年次の共通の題材の実践を通して、1年次で実践した授業では教員が計画を示し活動を誘導することで、安定した活動になるが生徒が主体とは言い側面もあった。そこで、2年次で実践した授業においては生徒自身で計画を考えたり、個々の班に応じて制作を進めたりすることで、生徒が主役となる授業の在り方に近づけたと考える。今後も活動の内容に応じて生徒自身で考えさせられる機会を確保することで、生徒の主体的な学びの実現を目指していきたい。

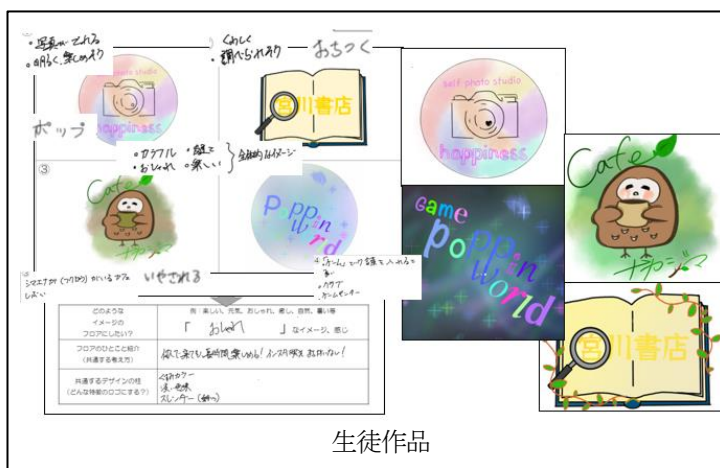
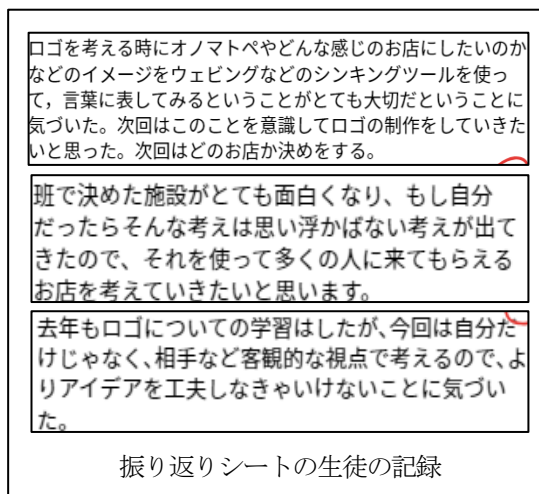
(2) 美術科における新たな意味や考え方を見出す思考力, 判断力, 表現力等を育成する手立て

本研究における思考力, 判断力, 表現力等を定義づけ、それらを育成する具体的な手立てとして、発想力に関しては、生徒自身が主題を生み出していくための、動機づけに繋がる題材や発問の工夫、構想力に関しては、生徒自身が主題を表していくための、工夫して表現してみたいという動機づけに繋がる構想を深めるワークシート (ICT) や画材、生徒間の対話の工夫、鑑賞の能力に関しては、主題を見取っていくための、形や色等の表現と特徴に注目させるワークシートの工夫と鑑賞資料の選定を考えた。

1年次と同様に、ワークシートは鑑賞の際には、表現の考える過程に沿った内容から作成したり、発問の構造をより詳細化したりすること等を実践することで、生徒の広く深く考える土台をつくることができた。

しかし、動機づけに繋がる題材を検討する中で生徒の学びをより深めるために、ロゴを考える際に「フロアのイメージ」と「店や施設のイメージ」を掛け合わせて考えるように設定したが、それを実現するためには言葉でイメージを共有することが必要となる。が、そこまで授業の中で考えを深め、班の中でイメージを共有することができなかった。(右図より「おしゃれ」という言葉には個々によって様々なイメージがあり、「おしゃれ」の中でもどのような「おしゃれ」のイメージを伝えたいかを考えさせられなかった。)活動を複雑にすることによって、考える機会は増えるが考えを深める働きかけを考える必要があった。

今年度の成果と課題を踏まえ実践を重ね、生徒が主体となる学びの実現に向け、題材や授業における生徒への働きかけなどについて検討していく。



7. 3年次の研究

2年間の研究成果を踏まえ、3年次では、「主体的な学び」のプロセスモデルを生かした、「新たな価値を創造する生徒」を

育むための授業実践の在り方についてまとめる。

(1) 「学習方略」のさらなる明確化

美術科における「学習方略」を「創造性」や美術科の目標の達成につなげるものへと高めるための手立てを考えていく。

校内で実施した「学びについての調査」によれば、美術科では「学習方法を工夫している」の質問に対して他の教科と比べて低い傾向にある。これは、数値が高かった数学科のように学習で目指す目標が分かりやすい教科と違い、美術科は、何をどのように学習したかが、またできるようになったかが分かりにくい。そこから、生徒が自身の主題が見つけれられない時や、主題を表すためにイメージができない時等の課題解決に困りが生じたときに、授業の中で「学習方略」を明確に示すことで、学習を工夫できるようにしたい。そして、題材を通して生徒自身ができるようになったことを振り返られるように、振り返りシートを活用していく。

[授業の手立てについて] → 「学習方略」となるもの

- ① 参考作品を分析する。(教員や生徒が制作したもの、過去の生徒作品、画家の作品等)
- ② 思考ツールを活用する。(ウェビング等)
- ③ アイデアスケッチ(作品)を分析する・意見交換する。
- ④ 作品を見て、振り返る・分析する・意見交換する。
- ⑤ 振り返りシートを分析する。
- ⑥ 既習の学習事項を確認する。

(2) 「新たな意味や考え方を見出す思考力、判断力、表現力」を育成するための評価の明確化

明確な評価規準を生徒に提示することによって、生徒に思考させる内容を焦点化し、B評価の具体的な姿を示していく。また、生徒に思考させる内容を焦点化する際には、題材間のつながりを意識し、思考した内容が各題材の学習を重ねる中で深まったり、発展したりできるようにしていく。

まず、B評価の具体的な姿について示すために振り返りシートを活用していく。題材の導入において振り返りシートを通して目標を確認し、生徒が目指す姿を示していく。振り返りシートで常に確認ができるようにすることで、継続して意識ができると考えた。次に、題材間のつながりを意識させるために、活動の中で既習事項を振り返る機会をつくっていく。また、C評価の生徒に対しては指導者が働きかける際に学習方略を活用しつつ既習事項を振り返る等して、問いが解決できるようにしていく。

8. 参考文献

国立教育政策研究所 教育課程研究センター(2020)『「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料(中学校美術)』

文部科学省(2017)『中学校学習指導要領解説 総則編』

文部科学省(2017)『中学校学習指導要領解説 美術編』

山梨大学教育学部附属中学校(2021)『令和3年度 研究紀要』

山梨大学教育学部附属中学校(2022)『令和4年度 研究紀要』

山梨大学教育学部附属中学校(2023)『令和5年度 研究紀要』

木村明憲(2023)『自己調整学習 主体的な学習者を育む方法と実践』明治図書出版社

新野貴則 古屋美那実(2024)『主体的な学びの実現を目指す美術科の指導方法—生徒の問いの形成を促す発問構成—』